

CMZ による上顎洞粘膜, 上顎骨, 扁桃への 組織移行濃度

長江 大介・早田 寛紀・武田 哲男
木谷 孔保・馬場 廣太郎・古内 一郎*

近年, 慢性副鼻腔炎は減少の傾向にあるといわれており, これは生活様式の欧米化や食生活の改善がその原因とされているが, 一方では抗生物質や消炎酵素剤など保存的療法の進歩もその原因の 1 つと考えられる。そこで今回私たちは副鼻腔粘膜 20 例および手術後感染予防に重要と思われる上顎骨 (犬歯窩の上顎洞開窓部骨) 5 例, 扁桃 1 例について CMZ の組織移行濃度を検索した。

方 法

CMZ 1 g を one-shot で静注し一定時間後に組織および血清を採取し, 組織移行濃度は *Micrococcus Luteus*, 9341 を試験菌とする薄層ディスク法により, また, 血清は上記試験菌を用いる薄層カップ法にて測定した。

結果および考察

CMZ の上顎洞粘膜および上顎骨内濃度は時間とともに減衰を示したように思われた。さらに上顎洞粘膜と上顎骨中濃度と血中濃度との間にはやや正の相関を認め, 上顎洞粘膜および上顎骨への血清への移行率は, それぞれ平均 36%, 13% で十分な移行を示し, このことは副鼻腔炎, 扁桃炎に検出率が高い溶連菌・

肺炎球菌に対しても十分な治療効果が得られると思われる。上顎洞粘膜には他臓器に比べても非常に良好な組織内移行濃度が得られ, これは血中濃度と相関関係があるようである。したがって感染を主病変とする型の副鼻腔炎に対しては, 適切な抗生物質を選択して必要血中濃度を維持することにより十分な治療効果を期待することができると思う。また骨については少数例ではあるが抗菌力を発現するに十分な組織内濃度が得られることが分った。副鼻腔炎の手術は粘膜を除去して骨を露出する術式であるから術後の感染防止には骨への抗生物質移行が充分行われることが望まれ, 術後経過の悪化が感染によつて引き起こされ成績不良例へと導かれることが多いことから抗生物質骨移行の意義を感じる。

質 疑 応 答

岩沢 (札幌通信) 上顎骨の採取部位は犬歯窩か対孔部の骨か, また bioassay 時の骨処理はいかがなされたか。

長江 (獨協医大) 上顎骨の採取部位は犬歯窩の上顎洞開窓部の骨で, 骨処理といたしましては採取時, 附着血をガーゼで軽くぬぐい -20°C で凍結保存しました。

微量検体による抗生物質濃度測定法

村井 兼孝・馬場 駿吉・和田 健二**
本堂 潤***・波多野 努****

耳鼻咽喉科領域において耳漏や上顎洞内貯留液など微量検体しか得られないものがある。化学療法におい

て使用薬剤が感染病巣にどれ程移行分布しているか知ることは極めて重要なことであり, 微量検体中抗生物

* 獨協医科大学耳鼻咽喉科学教室

** 名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科学教室

*** 名古屋第二赤十字病院耳鼻咽喉科

**** 豊橋市立市民病院耳鼻咽喉科